NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER 《QUARTERLY》 VOL. 224

名古屋市博物館だより

40th NAGOYA CITY MUSEUM

編集・発行／名古屋市博物館　〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655　FAX (052) 853-3636　http://www.museum.city.nagoya.jp

平成30年 (2018) 1月1日発行 無料
5,000部発行 (年4回1・4・7・10月)
古紙パルプ配合再生紙使用

博物館、とっておきのご披露です！ ～冬の巻～

1年間を通して常設展示室内で展示替えをしながら博物館の逸品を紹介します。国宝や重要文化財、教科書にも載っている資料や尾張の特徴的な文化などを幅広く紹介します。

1/5(金)▼2/25(日)

【重要文化財】　太刀　銘「国泰」
鎌倉時代末期～南北朝時代　館蔵

《通年企画》刀 剣

国泰が所属する延寿派は、山城国来派が肥後国に移住した集団と言われます。この刀もゆったりとカーブを描いたフォルムが山城国の刀工達の作風に通じます。刃文は直線の直刃を基調としますが、ラインに沿って小沸・匂いという大小の結晶が多くあらわれており、つややかな輝きに魅せられます。仙台伊達家の伝来品と伝えられます。　山田伸彦（美術工芸）

2/28(水)▼3/25(日)

【重要文化財】　短刀　銘「了戒」
鎌倉時代　個人蔵

《通年企画》刀 剣

了戒は山城国来派の主要な刀工の一人です。この刀は出羽国の戦国武将、秋田城介が所持したことから「名物秋田了戒」とも呼ばれます。江戸時代以降は長く加賀前田家に伝来しました。刀身は厚みがありますが、切っ先の背中側を薄く削いだ「冠落とし」という形状でバランスのとれたフォルムをしています。地肌には木の柾目の様な模様が浮き、よりシャープな印象を与えます。　山田伸彦（美術工芸）

1/5(金)▼2/25(日)

【重要文化財】　黒楽茶碗　銘「時雨」
本阿弥光悦作　江戸時代前期　館蔵（森川コレクション）

《テーマ 10》　森川コレクション

本阿弥光悦の手になる黒楽茶碗で、釉薬がほとんどかかっていない胴の部分の景色が、黒雲が立ちこめざっと時雨ふる初冬の空模様を思わせます。手に取ると、釉薬のない表面は意外にざらつきがなく、人肌になじみます。近代尾張の茶人森川如春庵がわずか16歳にして手にいれ、一番長く愛蔵した茶道具として名高いものです。

塚原明子（美術工芸）

1/5(金)▼2/25(日)

『東街便覧図略』
巻五から「吉原駅より望む富士山晴天之景」
高力猿猴庵著・画
寛政7年 (1795) 成立　草稿本　館蔵

《テーマ 9》　猿猴庵が描いた東海道

天明6年 (1786)10 月、尾張藩士の高力種信 (号：猿猴庵) は、殿様の命令で初めて江戸への旅に出ました。この時 31 歳、世の中の出来事を記録することに目覚めた彼は、旅で見た景色、土地土地の名物や風俗に心を奪われ、帰国後 9 年を費やして全7巻の大作『東街便覧図略』を仕上げました。当館では「猿猴庵の本」に収録して巻 6 まで刊行しましたが、1 月下旬には最終巻の巻7を刊行する予定です。これを記念し、この原本を展示します。猿猴庵が独自の視点で描いた東海道像をお楽しみください。　山本祐子（文書典籍）

開館 40 周年記念事業

平成 29 年 4 月から始まった開館 40 周年記念事業は、本物と出会う感動、日本や世界の文化を知る感動、名古屋の歴史を体験する感動、様々な「感動をよびさます博物館」を目指しました。

常設展では、「博物館、とっておきのご披露です！」として、国宝や重要文化財など博物館が所蔵、保管する逸品を、様々なコーナーで月替わりで紹介しています(3月まで開催中、1・8 ページを参照ください)。「めったに見られない物が見られた」「色々なところで展示されているのがおもしろい」「繰り返し来ます」といった声をいただいています。

また、特別展では国内外の歴史や文化を知っていただく展覧会を開催しました。シーボルトが海外に紹介しようとした日本の文物を展示した「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」(4/22-6/11)、お年寄りから子どもまで世代をこえた観覧者で賑わった「ゴジラ展」(7/15-9/3)、「ピーターラビット™展」(9/16-11/5)でも母娘での観覧が目立ち、幅広い層に博物館を体験していただくきっかけとなりました。「北斎だるせん！」展(11/18-12/17)では、今話題となっている葛飾北斎が名古屋と縁深いことを知っていただく博物館ならではの展覧会となりました。

イベントも 4 月 1 日の伊勢大神楽(いせだいかぐら)から始まり(写真①)、姉妹館であるウィーン博物館のマッティ・ブンツル館長を迎えてのウィーンレクチャー ＆ コンサート(写真②③)では、新しい博物館を目指すウィーン博物館の展望を知ることができました。

開館記念日である 10 月 1 日の開館 40 周年記念式典では、日ごろお世話になった方々、事業のために寄附をくださった皆様を招いて、感謝の意を伝える機会としました (写真④)。これまでにも協力をいただいてきた講談師旭堂鱗林(きょくどうりんりん)さん(写真⑤)、落語家雷門獅篭(かみなりもんしかご)さん(写真⑥) による名古屋の歴史に関わる一席を楽しんでいただき、さらに、祝い事には欠かせない菓子まきを行い、天から降るお菓子に来館者が殺到する迫力ある催しとなりました(写真⑦)。

この日は引き続き、幕末に流行した「ええじゃないか」の 150 周年にあわせて、ハラプロジェクトによる「100 人 HAIKAI エエジャナイカ」(写真⑧) を実施しました。お札降りから始まる民衆運動、それを伝える博物館資料と演劇集団とがコラボしたパフォーマンスは、夕暮れの博物館で練り歩く風変わりな人々、そして、熱狂。飛び入りで参加する子どもたちの姿も見られました。

博物館は資料を集めるだけ、展示するだけの場ではなく、国内・外様々な方々と連携しながら、多様な方法で歴史・文化を伝えることが必要となっています。この 40 年で博物館を取り巻く環境も大きく変わり、施設の老朽化・不足なども顕在化してきました。将来を見据え、博物館も根本となる部分を大事にしながら、大きく飛躍していく必要があると感じています。今後も皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

①伊勢大神楽

②ウィーンレクチャー＆コンサート

③ウィーン博物館ブンツル館長と伊藤館長

④開館 40 周年記念式典

⑤旭堂鱗林さんによる講談

⑥雷門獅篭さんによる落語

⑦菓子まき

⑧100 人 HAIKAI エエジャナイカ

関ヶ原直前における三成と家康の戦略

先日映画「関ヶ原」が公開され、空前のヒット作となった。この映画の主人公は徳川家康ではなく、石田三成である。実は筆者はその２月ほど前、はくぶつかん講座で「関ヶ原直前における石田三成の戦略構想」というテーマで話をした。講座のタイトルが決まったのは、講座の半年も前のことで、当時映画のことは知らなかった。この講座は、家康と三成の軍事的対立が決定的となる慶長５年(1600)７月末から８月初め、三成がどのようにして家康を倒すつもりであったのかを探るもので、４通の三成の自筆密書を使用した。うち３通は盟友の信州の真田昌幸あて、１通は常陸の佐竹義宣あてに出されたものである。この時期、徳川家康が各武将に出した書状は百数十通残っている。一方三成が自分の戦略を他の武将に表した資料は、現在この４通しか知られていない。４通ともかなりの長文であるが、おおむね次の３つの要素により構成される。

A 畿内周辺での情勢報告
B 相手にたいする軍事的な要請
C 今後の自分の方針

まずAでは、丹後国田辺城攻めや伏見城攻め、加賀の前田利長が老母芳春院を人質として江戸に送ったこと、利長が西軍の小松城を攻撃していること、大坂で細川忠興の室ガラシャが殺害されたことなどを報告している。Bでは、会津の上杉景勝に密使を送り届けるため、真田昌幸に中継点の役割を果たしてほしいとか、北信濃を占領してほしいとか依頼している。恩賞として信濃・甲斐の２ヶ国を与えるつもりであり、これは毛利輝元など西軍首脳も承知しているといっている。もちろん徳川秀忠の大軍が、真田昌幸が守る上田城に攻めてくるとは、夢にも思っていない。佐竹にたいしては上杉と連合して、関東の家康に圧力をかけてほしいと依頼している。重要な三成の戦略を示すのはCで、次の４点である。

1. 今年の暮れか来年早々、関東に軍を派遣する予定です。そのため、九州・四国・中国・南海から兵を集めます。８月末までには近江国に陣を築いて、そこに兵糧米を集めます。
2. 私は岐阜の織田秀信様と相談して、尾張から三河方面に進出する予定です。清須城主の福島正則は、わびを言ってくるでしょう。正則が味方しない場合、伊勢方面に派遣した軍とともに、清須に攻め込みます。
3. 家康は、急いで西上することを決めたようです。是非ともそうなってほしいもの（そうなれば撃破できるので）と、念願しています。
4. 家康が上方に向かった場合、毛利輝元は３万の軍勢を引き連れ、遠江国浜松付近に出陣することに決定しました。伊勢国に向けた軍勢も順次浜松方面に進軍させます。

ここから、三成は家康が大坂まで攻めてくるとはあまり思っていなかったことがわかる。年末か来年初めに関東を攻める予定で、近江を後方基地に、浜松を前進基地にするつもりであった。それにたいし家康は会津の上杉をけん制できれば、早急に三成方を攻める方針であった。江戸城に籠城することは、自分も参加した小田原城攻めの結果をみれば、無意味であることは明白である。まっすぐ三成を攻めた結果、この密書からわずか１ヶ月後、関ヶ原で三成を倒すことができたのである。

なお、家康が東軍を二分して半分を引き連れ、東海道を西上し、秀忠に半分を附属し、中山道を通らせたのはなぜであろうか。当時は街道が整備されていないので、２ルートの方が行軍が早かったからとか、秀忠は宇都宮から出発しており中山道の方が近いとか、自分が敗れたときの予備軍であったとか、いくつかの説がある。私が思うに、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』を愛読していた家康は、三成挙兵を知った時、自分が承久の乱（承久３年･1221）における北条義時と同じ立場になったことに気づいたはずである。義時は東海道だけでなく、東山道・北陸道にも軍勢を派遣して京都の後鳥羽上皇方を攻め、勝利を収めたのである。家康もその吉例にならったのではないだろうか。　（種田祐司）

◉特別展

Leonardo da Vinci
and The Battle of Anghiari

レオナルド・ダ・ヴィンチと「アンギアーリの戦い」展

～日本初公開「タヴォラ・ドーリア」の謎～

《タヴォラ・ドーリア》の寄贈と公開

2012 年、イタリア中が沸き立つニュースがありました。レオナルド・ダ・ヴィンチによる幻の壁画《アンギアーリの戦い》の謎を解く鍵《タヴォラ・ドーリア》が、イタリア共和国に寄贈されるというものです。《タヴォラ・ドーリア》とは、「ドーリア家の板絵」という意味で、ジェノヴァの貴族ドーリア家が長らく所持していた油彩画です。20 世紀に入り、ドーリア家の手を離れてからは、個人の元を転々とし、美術史上重要な作品にも拘わらず、限られた人しか見ることができない状態が続きました。そのような中、1992 年に東京富士美術館が購入、長い準備期間を経て、詳細な調査研究のためイタリアへと寄贈されることになったわけです。寄贈は大きな話題となり、当時のイタリア大統領自らが謝辞を寄せ、日伊友好の証として大々的に報じられました。程なく《タヴォラ・ドーリア》はフィレンツェ、ウフィツィ美術館に収まり、さっそくレオナルド展をはじめとする展覧会にて出陳されます。そして、この度、日本においてもレオナルド・ダ・ヴィンチと「アンギアーリの戦い」展のメイン作品として初公開される運びとなりました。

ルネサンスの二大巨匠 幻の競演

そもそも、レオナルドによる幻の壁画《アンギアーリの戦い》とは、どんな作品なのでしょうか。時は16世紀初頭、場所はフィレンツェ共和国。メディチ家の追放、サヴォナローラの処刑を経て誕生した当時の政権は、国家の威信を賭けた大事業を計画します。共和政治の中心シニョーリア宮殿大評議会広間（現パラッツォ・ヴェッキオ五百人大広間）を巨大な壁画で装飾するというものでした。選ばれた画家は、フィレンツェ領内出身のレオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロ・ブオナローティ。それぞれ、フィレンツェが勝利した

展覧会情報

会　　期｜2018 年 1 月 13 日（土）～ 3 月 25 日（日）
休 館 日｜毎週月曜日（ただし 2/12 は開館、翌 2/13 休館）、第 4 火曜日
開館時間｜9 時 30 分～ 17 時（入場は 16 時 30 分まで）
会　　場｜名古屋市博物館 1 階　特別展示室・部門展示室
観 覧 料｜一般 1,300（1,100）円　高大生 900（700）円　小中生 500（300）円

＊（　）内は前売および 20 名以上の団体料金。＊前売り券は 1 月 12 日（金）まで、名古屋市博物館、中日新聞販売店、主要プレイガイド、主なコンビニエンスストア、チケットぴあ（P コード 768-614）、ローソンチケット（L コード 45103）、セブンチケット（http://7ticket.jp）、イープラス（http://eplus.jp/）などで販売。＊名古屋市交通局の一日乗車券・ドニチエコきっぷを利用してご来館の方は当日料金より 100 円割引。
＊身体等に障害のある方または難病患者の方は、手帳または受給者証のご提示により、本人と介護者 2 名まで当日料金の半額。＊各種割引は重複してご利用いただくことはできません。ご了承ください。

主催　名古屋市博物館、中日新聞社　**特別協力**　イタリア文化財・文化活動・観光省美術館総局、ウフィツィ美術館
後援　外務省、文化庁、イタリア文化財・文化活動・観光省、イタリア大使館、イタリア文化会館、フィレンツェ市、名古屋日伊協会
協力　NHK エデュケーショナル、アリタリア - イタリア航空、日本航空、アルテリア、ヤマトロジスティクス　**企画協力**　東京富士美術館

名古屋会場オフィシャルサイト｜http://www.chunichi.co.jp/event/davinci/　ダ・ヴィンチ展　名古屋　検索

作者不詳（レオナルド・ダ・ヴィンチに基づく）《タヴォラ・ドーリア》フィレンツェ、ウフィツィ美術館

Ex S.S.P.S.A.E e per il Polo Museale della città di Firenze-Gabinetto Fotografico

栄光の戦闘「アンギアーリの戦い」（対ミラノ）と「カッシナの戦い」（対ピサ）を描くよう命じられました。既に高名だった巨匠二人を直接対決させようという野心的な計画です。ところが、レオナルドは壁画に適した油絵具の調整に手間取り、ミケランジェロは下絵制作の途中でローマ教皇に招聘（しょうへい）され、二人の競演は幻に終わってしまいました。

二人は一体どんな壁画を描こうとしたのでしょうか。レオナルドの壁画の手がかりとなるのが、先述の《タヴォラ・ドーリア》です。近年の科学的調査から、16 世紀前半の油彩画であると推定されました。描かれているのは勝敗を決する軍旗争奪の場面。レオナルドが未完成のまま放置した壁画を写したものと考えられています。人馬が複雑に絡み合う構図はレオナルドの発明であり、戦闘の激しさを鑑賞者に強く訴えかけます。

ミケランジェロの構想した壁画は、彼が残した下絵の模写が現存しています。レスター伯爵のコレクション《カッシナの戦い》は、《タヴォラ・ドーリア》同様、日本初公開となる作品。ピサ軍の強襲に対し、慌てて準備するフィレンツェ軍の姿を捉えます。ミケランジェロが、ライバルを意識しながら、どのような戦闘画を描こうとしたのか、その様子を窺うことができる貴重な作品です。

このように本展では、かつて計画されながら果たされなかった「ルネサンス二大巨匠の直接対決」をこの現代に実現させることを目的としています。その上で、両者が描いた戦闘画が後世にどれほど影響を与えたのか、どれほど美術の歴史を変えてしまったのか、その影響力を後世の戦闘画から振り返ります。《タヴォラ・ドーリア》の寄贈が導いた、世界が注目する展覧会。

ぜひご覧ください。

左　アリストーティレ・ダ・サンガッロ　《カッシナの戦い》（ミケランジェロの下絵による模写）レスター伯爵コレクション　By kind permission of Lord Leicester and the Trustees of Holkham Estate, Norfolk, UK　**右**　ピーテル・パウル・ルーベンスに帰属（レオナルド・ダ・ヴィンチに基づく）《アンギアーリの戦い》ウィーン美術アカデミー絵画館　Gemäldegalerie der Akademie der bildenden Künste Wien

＊《カッシナの戦い》は会期後半より展示。前半は複製展示。日程の詳細は、決定次第オフィシャルサイトにてお知らせいたします。

浅海の名産

伊勢湾の名産

桑名のハマグリ、志摩のアワビ、日間賀島や篠島のフグ。伊勢湾を見渡すと、三重県や知多南部には名産と呼ばれるものがあり、海女漁のような有名な漁もある。

一方で現在の名古屋港付近では、海産物や漁が連想されることは少ない。しかし、かつては水揚げされた魚介が市内各地に運ばれるなど、海とのつながりが深かった。そこで、名古屋周辺にも名産と呼ばれるものがあったかどうか、環境的な特徴と漁からみてみよう。

浅海という特徴

伊勢湾奥部の海の特色を一言で表すと、「浅海（せんかい）」といえるだろう。

伊勢湾は全体的に水深が浅いという特徴があり、その中でも湾奥には、干潮時に極めて浅くなる場所があった。

写真１は江戸時代に制作された絵図で、熱田から桑名にかけての沿岸を示している。色が濃くなっているのは、上流から運ばれてきた土砂が、川先で堆積した場所である。中川区下之一色で漁師をしていた犬飼さんによると、これらの場所は、「タカ」や「セ」と呼ばれ、ボウセキのタカ、オオダカ、ヨコテのタカなど、それぞれ地名があったという。クジラタカと呼ばれる場所もあり、かつてクジラが打ち上げられたと伝えられる。

海中にも地名が付けられたのは、漁などで場所を確認する必要があったためである。このような場所の多くは、現在は埋め立てによって陸地となっているが、かつては魚介類の生育に適していた。

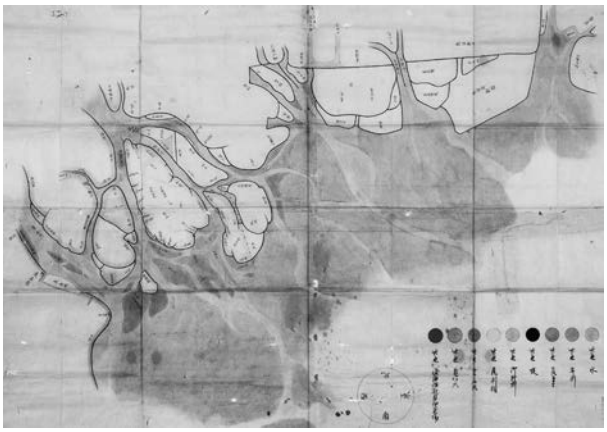


写真１　伊勢湾沿岸図　江戸時代後期　館蔵

写真２　貝を採る時に使う道具　館蔵

浅海の漁業と名産

浅海で行われた漁の中でも、多くの人が携わった漁に、貝を採る漁がある。

漁業専業者の多かった下之一色では、多くの人が夏から秋にかけて網漁で魚やエビなどを捕り、冬から春にかけては貝を採った。伊勢湾の奥部では、ハマグリ、チンメ、カキ、アサリ、シジミなど様々な貝が生息しており、貝の種類や生息する環境に応じて、様々な漁具が使われた（写真２）。

海岸の一部地域では農業とともに漁業が行われることもあり、南区柴田では稲作とともに、カキの養殖をしていた人もいたという。

このような採貝漁がいつから始まったかは定かではないが、江戸時代に編纂された『尾張名所図会』や『尾張志』などの地誌には、熱田、愛知郡の土産（産物の意）として、「牡蠣」（カキ）、「蛤」（ハマグリ）、「蜜丁」（チンメガイ）が挙げられ、「名産」「美味」と評価されている。

さらに、伊勢湾の奥部では、大正から昭和初期にかけて海苔養殖が普及した。多くの貝類が生息していたタカと呼ばれる場所では、アマミズ（真水）とシオミズ（海水）が混じり合い、良質の海苔ができたという。比較的新しい時代に始まった海苔養殖も、浅海という特徴を生かした漁業であった。

現在の景観からは想像することが難しいが、名古屋の海の名産は、浅海という特徴と結びついていた。このように「環境」や「産物」をテーマにすることで、今ではみられなくなった、この地域の海と結びついた生活が浮かび上がると思う。

（長谷川洋一）

開催予定

平成 30 年度夏期の特別展「海たび（仮称）」に向けて、調査を進めています。

『豊臣秀吉文書集』にみる秀吉の姿

『豊臣秀吉文書集』は、今年いよいよ4巻刊行

平成24年から編集作業を本格化させてもう5年。長いと思っていたが、もう「小田原」まで来てしまった…というのが素直な感想です。7,000通を超える秀吉発給文書を編年で通覧する『豊臣秀吉文書集』の刊行は、今年度で天正17年(1589)～18年分の4巻となりました。1巻につきおよそ900通を収録、しかも秀吉の勢力拡大につれ地域や活動も広がっていくため、編集作業は常に手探りです。それでも、秀吉文書を通覧することで見えてくる秀吉の姿があるように思います。

秀吉の記念碑的合戦「小田原合戦」

「小田原」とは、秀吉が天下統一の総仕上げとして天正18年3月から開始した、関東の後北条氏への軍事行動「小田原合戦」のことです。秀吉は前年11月に正式な宣戦布告を行った後、直ちに戦闘準備に入りますが、その周到さからは、未だ足を踏み入れたことのない東国に挑む気概が垣間見えます。動員された兵の数は北条方10万人に対して、豊臣方20万人以上。本体の秀吉軍だけでも4万人と言われ、戦国史上最大の合戦となりました。

宣戦布告状の既視感

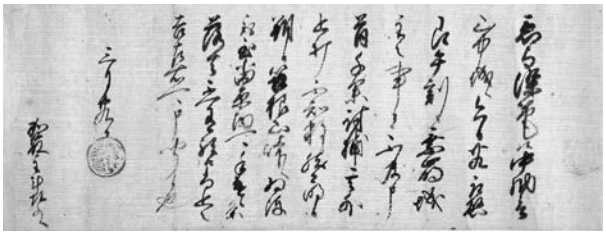
合戦の端緒となった天正17年11月24日付の宣戦布告状は、特異なものです。宛所に記されたのは北条氏当主・氏直1人ですが、実際は複数の大名宛に発給されていて、宣戦布告とともに秀吉の軍事行動を正当化する所信表明となっているのです。

この内容を読んでいくと、前半は北条氏の行状を非難したものですが、後半から秀吉自身の合戦半生を回顧しその正当性を縷々(るる)述べるものとなっています。「自分は若輩の時、信長公のもと心骨を尽くして戦功を立て、西国大名との戦を任されていたが、明智光秀の謀反を聞いて、直ちに上洛し主君の仇を討った。また柴田勝家も国家を乱したので退治した…」という具合です。私は(どこかでこんな長い「自伝」を見たことがあるぞ‥)と記憶をたどります。実は天正16年、佐々成政誅伐の時にも、秀吉は各大名に宛てて成政の誅伐を宣言し、「成政は柴田勝家が謀反した時、勝家と同心し金沢城で秀吉に対抗したが、秀吉が許してやった。その後織田信雄に与して反抗した時も許してやった。九州攻めの時も…」と、自らの厚恩を連ねていました。成政に対しては、すでに前年の天正15年、肥後一揆の処理について同様の譴責(けんせき)文を九州の諸勢宛てに出しています。

秀吉の思考回路

秀吉の「履歴書」ともいえるこのような文書は、更に遡り天正13年の紀州攻め、天正11年の賤ヶ岳の戦いの際にも出されています。その端緒となる一連のものが天正10年10月の信長葬儀前後に出されており、中でも3,000字に及ぶ10月18日付書状写(金井文書)は、内容の濃密さに圧倒されます。書状というより、もはや物語のようです。かつて、秀吉の主である信長も、足利義昭や佐久間信盛の罪状を長文で羅列したことがありますが、秀吉は自らの事蹟を延々と述べる点が特徴です。彼の脳内には、おそらく自分の半生が絶えず積み上げられているのでしょう。それは逆に、名もなき身分であった己の出自を常に出発点として意識している証左ともいえます。

話を小田原合戦に戻すと、天正18年5月鉢形城攻略の際に、秀吉重臣の浅野長吉も秀吉から譴責を受けています。ここでも過去の業績を羅列し、特に毛利攻めの際の奮闘を挙げて「なぜ自分のようにできないのか」と責めています。彼の基準は常に自分のたどってきた道筋にあり、それを敢えて披露するという独特の方法で正当化を図っているのです。こんな上司、ついていくのは大変そう…今後も更に様々な秀吉の姿が見えてきそうです。(岡村弘子)



豊臣秀吉朱印状　(天正18年)3月29日付　館蔵
小田原に向かう最中の秀吉が、熊本の加藤清正に「山中城(静岡県三島市)を攻略した。小田原城もすぐに落とすぞ」と意気揚々に伝えています。

『豊臣秀吉文書集』第4巻(天正17～18年)は、吉川弘文館から2月刊行予定です。

3/6(火)▼3/25(日)

廓の明け暮　昼見世前

歌川国貞（三代豊国）　江戸時代後期
館蔵（尾崎久弥コレクション）

《フリールーム》　浮世絵 英泉・国貞・国芳・広重

幕末を代表する人気浮世絵師、歌川国貞（三代豊国）が江戸の新吉原遊郭の様子を描いたシリーズの一枚（下絵）です。本図は営業前に同僚と談笑を交わす遊女のひとときを描いています。出版にいたらなかったようで、珍しいことに、この下絵と草稿が残っています。前段階にあたる草稿もあわせて展示しますので、国貞がどう推敲しているのかをご覧いただけます。

津田卓子（美術工芸）

1/24(水)▼3/25(日)

百花文七宝大壺

安藤七宝店 製造　林喜兵衛 作　明治後期　館蔵

《テーマ 12》名古屋市の成立と近代産業

近代尾張の工芸を代表する七宝の大壺です。色とりどりの花が咲き乱れ、その間を小鳥が飛んでいます。まるで絵付けしたような細かいモティーフですが、下地に金属線を貼り付けて象り、その中にガラス質の釉薬を施して色付けする有線七宝の技法で表現しています。圧巻の職人技をぜひ間近でご覧ください。

横尾拓真（美術工芸）

博物館、とっておきのご披露です！ ～冬の巻～

2/28(水)▼3/25(日)

野口道直六十宴之図并賛

天保15年（1844）9月9日　館蔵

《テーマ 10》道直さんをお祝いする。

野口道直（1785～1865）は、『尾張名所図会』発刊の立役者の一人で、多くの書物を読み、集める博学の人でした。

描かれている宴は、『尾張名所図会』を力を合わせて作り上げた深田精一、岡田文園、小田切春江らと共に名所図会前編の刊行と、道直が60歳になったことを祝うものです。このおめでたい席の床の間に飾られている青い本こそまさしく・・・。

星子桃子（文書典籍）

通年展示中

有舌尖頭器

豊田市上川口出土
縄文時代草創期
館蔵（小栗鉄次郎コレクション）

《テーマ 1》　狩猟・採集の時代

有舌尖頭器は、縄文時代の初め、およそ1万数千年前に槍の先に付けられていた石器です。全体のかたちは、ずんぐりとした印象があります。もっと長かったものが折れてしまい、先端を作り直したためかと思われます。

石器の右側から斜め下に向かって石器を作ったときに押し剥がした痕が並んでいます。これは斜状並行剥離と言って有舌尖頭器の特徴です。この石器に残されている斜状並行剥離は、もっとも見事なもののひとつで、美しささえ感じさせてくれます。

川合剛（考古）

【おわび】 前号223号で紹介しました「伊勢参宮図屏風」は愛知県指定文化財ではなく、名古屋市指定文化財です。訂正しておわび申し上げます。

東海学園大学　名古屋市博物館開館40周年オフィシャルサポーター